2024 10.14 vol.1088

JAグループ

JA全農ウィークリー

JA ZEN-NOH WEEKLY

Web版
JA全農ウィークリーは
こちらから

https://www.zennoh-weekly.jp/

3面
ピーマン自動収穫ロボット
実証試験
（岩手県本部）

6-7面
「農業界と大学生の出逢いの場を創る」
㈱NOPPO代表取締役
福本由紀子さんに聞く
（広報・調査部）

配送先変更（住所・宛名）、
配布部数変更はこちら

写真提供：青森県本部

全農 ZEN-NOH

食と農を未来へつなぐ。

News!

子実とうもろこし収穫実演会を実施

宮城県JA古川との大規模実証　10アール900キロ超す

米穀部

全農は、9月10日に宮城県JA古川の協力のもと、JA管内の圃場で子実とうもろこしの収穫実演会を実施し、全国から130人が参加しました。

JA古川での大規模実証は今年が3年目の最終年度。実演会冒頭、同JAの佐々木浩治組合長からは「非常に大きな成果が得られ、全国に発信できる取り組みとなった」。また、大豆・麦生産組織連絡協議会の鈴木正一会長からは「今後は、当初想定していた子実とうもろこし・大豆・水稲の3輪作体系に麦を加えた、3年4作にも取り組みたい」とのあいさつがありました。

その後、今年の生育状況などの説明、大型機械による刈り取り収穫・残渣処理・すき込み（プラウ）作業が一貫して行われ、機器を用いたカビ毒検査の実演なども実施しました。収穫実演した圃場の収量は、アワノメイガや帰化アサガオの適期防除を徹底したことにより、10アール当たり900キロを超え、前年の全体平均収量575.5キロを大きく上回りました。

今後、後作大豆の収量調査なども行い、3年間の実証試験の内容を取りまとめる予定です。

大型機械での刈り取り収穫

前年を上回る収量となった子実とうもろこし

News!

「あきたこまち」40周年祝い感謝祭

「あきたこまち」・せんべい配り、多彩な催しでにぎわう

秋田県本部

秋田県本部とJAグループ秋田は、「あきたこまち」が9月7日にデビュー40周年を迎えたことを記念し、40年間支えてきた生産者と消費者に感謝を伝える「あきたこまち感謝祭」をイオンモール秋田（秋田市）で開催しました。

来場した先着700人一人一人に対して、秋田県本部の小松忠彦運営委員会会長や椎川浩県本部長が、「40周年記念デザインのあきたこまち2合」と「40周年記念あきたこまちせんべい」を感謝の気持ちを込めて配布しました。

イベントでは、「秋田あくらビール」とコラボし、原料の一部に「あきたこまち」を使用した40周年記念ビールや、「あきたこまち」のおにぎり・弁当などを販売。ステージでは「なまはげ太鼓」や来場者が参加できる「お米40キロ重量挙げ選手権」を行い、優勝者には「あきたこまち」40キロを贈呈しました。

「あきたこまち」の誕生から現在までを紹介した年表パネル、県本部が公式Instagramで7月から40日間投稿を続けてきた「#拝啓あきたこまちより」のメッセージも展示し、会場は「あきたこまち」一色となりました。

会場は多くの人でにぎわった

「あきたこまち」のおにぎりや弁当を販売

News!

ピーマン自動収穫ロボット実証実験

産地での実証は全国初　3年後の実装を目指す

岩手県本部

岩手県本部は、JA全農いわて先進園芸実証農場でピーマン自動収穫ロボットの実証実験を開始しました。レール走行式のピーマン収穫ロボットが産地で利用されるのは全国初です。

ロボットは、搭載カメラに映し出されたピーマンが収穫に適しているかAI（人工知能）を用いて判別し、アームについたはさみで収穫します。収穫作業を任せきりにできるため、人手をほかの作業に充てられることが利点です。

県本部では3年後の実装を目指し、農場の施設化を含めた「ピーマン栽培パッケージ」として、県内への導入を進めていく方針です。

県本部園芸部生産振興戦略室の平坂健宏室長は「農業従事者の減少や人手不足、夏場の酷暑での作業といった課題がある中、農場の施設化やロボットなど、さまざまな技術の導入で安定的な生産と収入が見込める農業の構築を目指したい。実証試験期間中は視察もできるので、まずは多くの生産者に収穫作業が自動化できることを実際に見ていただきたい」と話しました。

視察は事前申し込みで受け付けています。

農作業用レールの上を自走しながらピーマンを収穫するロボット

News!

羽田空港第１ターミナル　バナー広告を更新

「農協シリーズ」「JAタウン」5度目のリニューアル

広報・調査部

全農は10月1日、羽田空港第1ターミナルへ掲出中のバナー広告を2024年度下期デザインへ更新しました。

22年度から掲出を開始した羽田空港第1ターミナルのバナー広告について、今回5度目の更新を行いました。

バナー広告を通じて、空港を利用する幅広い世代の利用者に対して全農の社会的役割を発信するとともに、国産農畜産物の消費拡大、全農ブランドの知名度向上に向けてPRしています。

2030年の全農グループの目指す姿に向けたブランドメッセージ「食と農を未来へつなぐ。」を記したバナーは、全農の認知度・好感度向上を図るために引き続き掲出します。

リニューアルの内容は、「農協シリーズ」のバナーを、食を楽しむ子どもの笑顔を中心に、「食と農を未来へつなぐ。」のブランドメッセージを訴求するデザインに更新。また、「JAタウン」のバナーは、全農が運営する産地直送通販サイトとしての認知度向上を図るため、秋冬デザインに変更するとともに、「通販サイト」であることが連想しやすいデザインとしました。

「農協シリーズ」のバナー広告

「JAタウン」のバナー広告

News!

大阪の商談会に全農グループ共同出展

万博のインバウンド需要に着目し農畜産物・加工品を提案

営業開発部

全農は、9月4、5日に大阪市内で開催された「フードストアソリューションズフェア2024」に全国農協食品㈱、全農パールライス㈱、JA全農青果センター㈱、JA全農たまご㈱、JA全農ミートフーズ㈱、全農チキンフーズ㈱、協同乳業㈱と共同出展しました。

商談会には446団体が出展し、1万6152人が来場しました。

全農グループのブースでは、「食と農を未来へつなぐ PRIDE OF JAPAN」をテーマに、来年開催予定の大阪万博におけるインバウンド需要に着目して国産農畜産物や加工品の提案を行いました。

パン・麺向けなど、用途にまでこだわった米粉、時短ニーズに合わせた下ゆで野菜「みんなのやさい」や加工品のつくね串、グミをはじめとしたニッポンエールブランド商品に加え、関西地区での販売に力を入れる農協牛乳をはじめとした農協シリーズ商品（農協たまご、農協ロースハム、農協ウインナー、農協ごはんなど）をPRしました。

全農は、グループ会社と共同で今後もJFフードサービスパートナーズ商談会やJAグループ国産農畜産物商談会などの各種商談会の出展に取り組みます。

ブースではグループ各社が試食を提供しながら商談

全国各地の原料を使用したニッポンエール商品を展示

News!

ジュンテンドーと包括連携協定締結

JA広島市管内のジュンテンドーの一部店舗で営農用資材の取り扱いを開始

耕種資材部

全農は9月18日、中国・近畿地方でホームセンターを展開する㈱ジュンテンドー（本社：島根県、営業本部：広島県）と営農用資材の取り扱いについて包括連携協定を締結し、調印式を行いました。

JAグループは肥料・農薬などの営農用資材の供給において、組合員からの事前予約を積み上げて計画配送することを基本に、組合員との接点強化に向けた「出向く体制」と「出迎える体制」の整備に取り組んでいます。

JAの資材店舗は、組合員を「出迎える」重要な接点となるため、全農はこれまでJA基幹店舗の設置支援やCS甲子園の開催など売り場の活性化を支援してきました。

全農では、JAの店舗集約が進む中でも、土日対応などの組合員の利便性を確保するための対応策の一つとして、外部企業との連携について検討を行っています。このたび中国・近畿地方でホームセンターを展開するジュンテンドーと包括連携協定を締結しました。今後、JA広島市管内にあるジュンテンドーの一部店舗で営農用資材の取り扱いを開始します。

調印式に出席した（左から）JA広島中央会の上野信之専務理事、全農の日比健常務理事、JA広島市の吉川清二代表理事組合長、ジュンテンドーの飯塚正代表取締役社長、広島県本部の安藤重孝県本部長

JAズームイン

循環型農業でブランド構築 大区画化に対応し新CE稼働

JA岩手ふるさと（岩手県）

胆沢扇状地の肥沃な田園地帯

JA岩手ふるさとは、岩手県南部に位置し、奥州市（江刺を除く）と金ケ崎町の1市1町で構成されています。西には胆沢川が生み出した肥沃（ひよく）な胆沢扇状地、東には北上川が流れる田園地帯が広がる自然豊かな環境が魅力です。

輸出も視野に多様な販売 履歴記帳やGAPを徹底

JA管内では、家畜の堆肥を用いた循環型農業が実践されているほか、水稲「ひとめぼれ」や、高品質なピーマンをはじめとする夏秋野菜、ブランド和牛「前沢牛」などが生産され、東北有数の農畜産物の産地として地位を確立しています。

シンガポールでの販売促進イベント

組合員の経営安定を目指し、農畜産物の「安全・安心」と「おいしさ」の両立に取り組んでいます。販売力の強化や多様な販売形態、さらには海外市場への輸出を進め、アジアや欧米でのブランド構築に努めています。また、生産履歴記帳やGAP（農業生産工程管理手法）の導入により、リスク管理を徹底し、質の高い営農指導を通じて農畜産物の品質向上を図っています。

トラックスケール導入 高性能コンバインに対応

今秋、奥州市胆沢小山峠地区に「胆沢カントリーエレベーター（CE）」を新設し、8月9日に落成式を行いました。施設は延べ床面積1501平方㍍、生もみ3579㌧を保管・処理する能力を持っています。

JA管内初となるトラックスケールを導入し、出荷作業の効率化も実現しました。施設は、旧設備の老朽化や基盤整備による圃場（ほじょう）の大区画化、高性能コンバインの刈り取り能力への対応を目的として新設し、9月6日からは米の荷受けが始まっています。

新設された胆沢カントリーエレベーター

生成AIを業務に活用 DX推進へプロジェクト

生成AI（人工知能）を業務の中核に据えたDX（デジタルトランスフォーメーション）プロジェクトを8月に発足しました。

DXの活用により、業務の効率化と生産性向上を図り、職員が組合員に寄り添った活動と対話を重視できる環境を整備します。今後も、組合員・地域の皆様に質の高いサービスを提供しつつ、持続可能な社会の実現を目指します。

概要	2024年3月31日現在
正組合員数	9834人
准組合員数	6232人
職員数	369人
販売品取扱高	137億8千万円
購買品取扱高	48億円
貯金残高	1418億8千万円
長期共済保有高	3038億7千万円
主な農産物	米、ピーマン、アスパラガス、キュウリ、リンドウ、小菊、肉牛

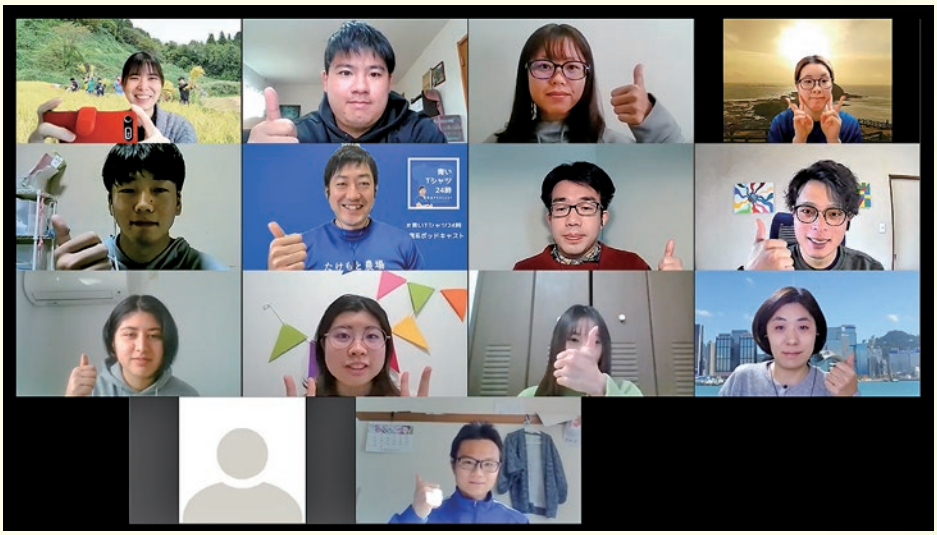
NOPPO

農業に興味のある若い世代にもっと情報発信、交流の場を

「農業界と大学生の出逢いの場を創る」

㈱NOPPO代表取締役　福本由紀子さんに聞く

㈱NOPPOは、「農業界と大学生の出逢いの場を創る」会社として2006年3月に設立し、農業に興味のある大学生をターゲットに情報発信や活動の場を創出しています。代表取締役の福本由紀子さんに話を聞きました。【広報・調査部】



オンライン開催の「アグリゼミ」

オンライン「アグリゼミ」「農業界地図」や体験・研修

――事業について教えてください。

会社が掲げるテーマである「農業界と大学生の出逢いの場を創る」のとおり、「農業×大学生」の交流の場を創出する活動をしています。具体的には、地域を超えて農業者・農業関係者の方々と大学生の交流を生み出すオンライン開催の「アグリゼミ」、就活生にはなじみのある「業界地図」の農業版「農業界地図Agri-map」（アグリマップ）の製作、新潟県長岡市や秋田県大潟村の稲作農家の方々にご協力いただいて開催する稲作体験・研修の企画、大学生目線で農業を伝えるフリーペーパー「VOICE」の製作（休刊中）などを行っています。

直近は㈱マイファームが農林水産省の令和6年度農業教育高度化事業により開催する学生・指導者・現役農業者向けに農業のリアルを知り、学んでもらう「ミライの農業をつくる研修プログラム」にも運営側で参画しています。

農業者に取材する学生

㈱NOPPO代表取締役
福本由紀子さん

大学の部活で農業を知り農業者の声聞く場つくる

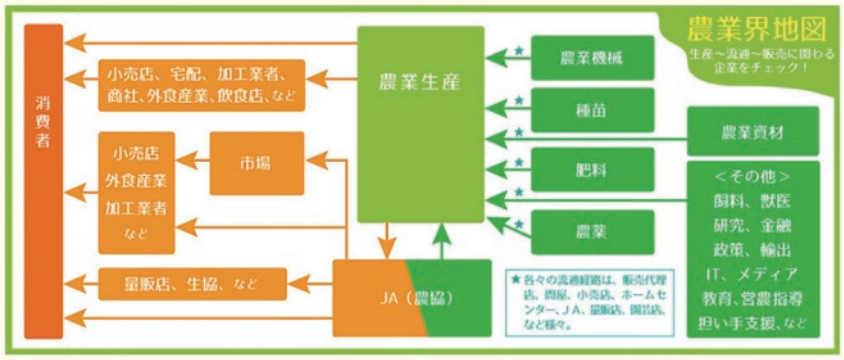
――NOPPOの事業を行うきっかけを教えてください。

私は実家が農家ではないので、大学に進学するまで農業に関わる機会はほとんどありませんでした。環境問題に関心を持つようになり、東京農

ミライの農業をつくる研修プログラムでの現地視察

㈱NOPPOのHPはこちら

業大学へ進学したことをきっかけに農業を身近に感じるようになりました。在学中に農業関連の部活に所属し、農業を学びながら実際に現場の方々と関わる中で、「世間では農業の課題が話題になることが多いが、現場では高い志や思いを持って農業に取り組む農業者の方々が多くいらっしゃる。正しい情報を世間にも大学生にも知ってほしい」という思いを持つようになり、現在にいたります。



農業界地図 Agri-map

農業体験は農業者から直接話を聞ける貴重な機会

――NOPPOで活動する大学生はどのように農業に関わっていくのか教えてください。

当社の活動の一つである新潟県や秋田県で行う農業体験・研修では、大学生に参加を呼びかけ、各地から参加した学生たちが実際に農作業を体験しながら普段聞くことのできない農業者の方々の声を直接聞くことができる場や交流の場を提供しています。

現地での参加が難しい学生は、定期的に開催している少人数制の農業オンライン勉強会「アグリゼミ」に参加することで毎回異なるテーマの農業トピックを学びながら、実際にそのテーマに関連する農業者・農業関係者の方々とオンラインで交流することができます。

より深く農業界と関わりを持つことを希望する学生には、当社が取り組む「農業界地図Agri-map」や「アグリゼミ」の運営に携わり、実際に自分たちで関心のあるテーマを決め、テーマに関する方にアポイントを取ったり、取材や記事作成、プレゼン資料の作成などを通じて、主体的に農業と関わることのできる機会を提供しています。

若い世代増えて活発に「農業界に就職」後押し

――今後の展望を教えてください。

農業を盛り上げていくのは、実際に農業に携わる農業者の方々や農業界で働く方々ですが、そこに大学生をはじめとした若い世代が関わっていくことによって、取り組みがより活発になっていくと感じています。

実際に農業界に就職する学生たちの姿を見ていると、元々農業に興味がある学生にも、今まで農業との関わりがなかった学生にも情報が届き、関わりを持てる方法が確実に増えていると感じます。今後、農業の正しい情報がより多くの人に認知され、農業界と大学生がつながることが当たり前になり、「農業界に就職する」ということが、よりメジャーになることを目指して、学生たちの後押しを続けていきます。

NOPPOで活動する学生の声

就職先の選択肢に農業「アグリゼミ」で情報交換

名城大学経済学部産業社会学科
堀川（ほりかわ） 双（そう） さん

NOPPOの活動に参加するきっかけを教えてください。

就職先の選択肢として農業を考え始めた時に「もっと農業の勉強を日常的にしたい」「同世代と農業をテーマに交流したい」という思いから、X（旧 Twitter）で「大学生　農業　交流」と検索。そこで NOPPOの活動を見つけました。

「アグリゼミ」に参加した感想を教えてください。

「アグリゼミ」では同世代との交流ができるだけでなく、他の学生がどのような思いで農業と関わっているのか知ることができ、同時に自分が農業にどのような思いを持っているのかを見つめ直す機会になりました。また、農業系の学校に通っているわけではない私にとって、実際にいま農業に関わっている方からのお話を聞けたり、情報交換ができたりすることはとても貴重な経験でした。

今後の農業界の担い手確保のためには NOPPOのような活動が必須なのではないかと思っています。

堀川さんは卒業後、北海道の酪農法人で就職されるとのことですが、就職活動の中で感じたことを教えてください。

農業関係の企業説明会などの就活イベントの情報は、探せば見つかりますが、「農業の生産現場で働きたい」と思った時に情報収集に苦労しました。実際に農業の生産現場で働いている方の「自分はこのように就活を進め、現在農業とこのように関わっています」といった声がもっと聞けるようになるといいなと思いました。

社会人一歩目を、農業で始められることを今はとても楽しみにしています。

工藤阿須加が行く 農業始めちゃいました STARTED FARMING
JA全農提供　BS朝日（BS5チャンネル）
俳優工藤阿須加さんが農家へ転身した様々な人の"就農のリアル"に迫ります！
毎週水曜22:00～22:30放送

久米仙酒造×ニッポンエール

「Wレモンサワーの素」を新発売

久米仙酒造との共同開発商品

久米仙酒造×ニッポンエール
Wレモンサワーの素

全農は久米仙酒造㈱と連携し、「久米仙酒造×ニッポンエール　Wレモンサワーの素（もと）」を共同開発しました。10月16日から生協などを中心に発売します。　【営業開発部】

「久米仙酒造×ニッポンエール Wレモンサワーの素」は、JA広島果実連が供給する広島県産のイエローレモンとグリーンレモンの果汁を使用したサワーの素です。無糖で2種類のレモンの香りと素材本来の味わいをいかしたサワーの素に仕上げました。

全農は、国産農畜産物の消費拡大や生産振興に向けて、今後も「ニッポンエール」の取り組みを全国の産地・品目に拡大していきます。

「3－R」稲刈り体験会を開催

親子9組、耕畜連携や資源循環の仕組みも学ぶ

広島県本部は9月21日、耕畜連携・資源循環ブランド「3－R（さん・あーる）」に取り組む農業法人連携組織「おぐにフィールド」の圃場（ほじょう）（世羅町）に親子9組を招き、「3－R」稲刈り体験会を行いました。　【広島県本部】

体験会は、今年で3回目。参加した親子9組は、5月の田植え体験会、7月の3－Rのキュウリ苗植え体験会にも参加しました。

参加者に、今年5周年を迎えた3－Rブランドについて、耕畜連携や資源循環の仕組みなどを説明。その後、3－Rブランドの商品であり「循環米せらにしあきさかり」の原料となる、「あきさかり」の稲刈り体験を行いました。

参加者は、「稲を刈るのが難しかったが、楽しかった。これからもお米をたくさん食べる」と笑顔で話しました。同組織の小迫高代表は「資源循環や米がどのようにできているのかを知ってもらい、食の大切さを実感してほしい」と語りました。

親子で稲刈りを体験した参加者

JA全農の産地直送通販サイト

JAタウン ショップ紹介

しずおか「手しお屋」

小ぶりで球形の「石川小芋」はサトイモの仲間で、「石川早生丸」というサトイモの孫芋です。親芋1株に子芋が約6個でき、その子芋に「石川小芋」となる孫芋が3、4個できます。親芋・子芋から栄養をたっぷりもらって育つ孫芋は、最もおいしい部分と言われています。

その栽培方法は門外不出。肥料の量、水管理など細心の注意を払い、収穫後は周りについた毛羽を手作業で取るなど、愛情をかけて大切に育てられています。

「石川小芋」は、ゆでると皮がつるんとむけて肌はきめ細かい白色、ねっとりとした食感とコクのある味が特徴です。煮崩れしにくく硬さやえぐみもないので、汁物、煮物、焼き物と幅広い料理でお楽しみいただけます。

皮のむきやすさが特徴です。

石川小芋2kg・L
JA遠州夢咲（サトイモ）・・・8350円（税込み）

▶ JAタウンはこちらから https://www.ja-town.com
▶ お問い合わせは shop@ja-town1.com

ご注文はこちらから

発行／全国農業協同組合連合会　2024年（令和6年）10月14日発行（毎週月曜日発行）
第3484号　編集・発行人／広報・調査部　澤田洋志
〒100－6832 東京都千代田区大手町1丁目3番1号JAビル　TEL03（6271）8055

休刊のお知らせ
10月21日号は休刊いたします。
次号は10月28日号です。

私たち全農グループは、
生産者と消費者を　安心で結ぶ懸け橋
になります。